

パソコン時代の終焉（2）

ジョブズ氏はアイパッドの開発に当たって、開発現場に「曲を選択するまでに3回以上もボタンを押させるな」と要求した。

また、ぶ厚く難解なマニュアルが横行する中、マッキントッシュの開発チームの会議においてライターの1人が「高校3年生でも読めるように書かなくては」といったところ、ジョブズ氏は「小学生が読めるようにすべきだ。いっそ小学生に書いてもらったらどうだ」と反論した。

これらのエピソードからは、ジョブズ氏がIT器機やソフトの開発に当たって、常にシンプルさと利便性を追い求めて止まなかった事が分かります。

ジョブズ氏は、インターネットの可能性を理解する一方、限界も感じていたようです。それが「インターネットは驚異的だが感動をよびおこすことはない。感動的なことをコンピューターで実現したいのだ」という発言になって現れます。確かに、今では、インターネットを通じて映画を見、音楽を聴くことが出来る世の中になりました。それは、インターネットが単なるデータを運ぶだけでなく、感動を運ぶツールへと進化してきたということだと思います。

「過去ばかり振り向いていたのではダメだ。自分がこれまで何をして、これまで誰だったのかを受け止めた上で、それを捨てればいい。」

私たちは、僅かな成功体験に引き摺られて自己改革を怠り、結局新しい時代に乗り遅れてしまうということが往々にして起こります。

1985年、ジョブズ氏は30歳の誕生日を迎え、誕生パーティには1000人もの人が集まったといえます。それは、彼がマッキントッシュを世に送り出した大成功者だったからです。しかし彼は、その大成功者という殻を自ら打ち破ることで、新たな時代を切り開くことに成功したのです。

「美女にライバルがバラを10本贈ったら、君は15本贈るかい？ そう思った時点で君の負けだ。」

「アップルが勝つためにマイクロソフトを負かさなければならないとしたら、アップルは負けることになる。」

ジョブズ氏が常に求めていたのは、独創と革新です。例えば、ライバルが1

0本のバラなら自分は15本という発想では改善の域から脱することが出来ず、真の革新的な技術を生み出すことはできません。

また、マイクロソフトとの関係についても、マイクロソフトからシェアを奪うことが勝利なのではなくて、マイクロソフトには真似の出来ないほどの革新を続けること、ユーザーを喜ばせることが真の勝利なのだと考えていたのだと思います。

「必要な治療はコスト削減ではない。苦境から抜け出せる革新を行うことだ。」

この指摘は、法人を経営している立場からすると、結構耳の痛いところですよ。単なるコストカッターでは、次への展望を開くことは出来ないということです。

ジョブズ氏は、2004年膵臓癌が見つかり、2011年CEOを辞任するに至ります。

「この地上で過ごせる時間には限りがある。本当に大事なことを本当に一所懸命出来る機会は、二つか三つくらいしかない」

「今日が人生最後の日だったら、今日やろうとしていることをやりたいか？」

これらは、ジョブズ氏がスタンフォード大学の卒業式で述べたスピーチの一節です。

誰にでも、必ず死は訪れます。「その限られた時間を無駄にせず、大事なことを一所懸命にしなければならない」というのは普遍の真理です。

ジョブズ氏はそのことを、身を以て示し、学生達に語ったのでした。

彼が今もなお元気であったなら、これから先どんな世界を我々に見せてくれたことでしょうか。

享年56歳、ジョブズ氏の死は余りに早く、残念でなりません。

(塾頭 吉田 洋一)